

熊大通信

KUMADAI TSUSHIN
May.2001

Vol.1

創刊

特別企画

VISION
21

創刊記念対談

潮谷義子 熊本県知事

江口吾朗 熊本大学長

広報誌創刊に寄せて



熊本大学の理念

本学は、
教育基本法及び学校教育法の精神に則り、
総合大学として、
知の創造、継承、発展に努め、
知的、道徳的及び応用的能力を備えた人材を
育成することにより、
地域と国際社会に貢献することを
目的とする。

21世紀がスタートしました。社会における大学の置かれる状況が大きく変わってきています。大学は、地域において、文化的、社会的、経済的に不可欠な存在として貢献できるよう、更に努めるべきでしょう。

この度、大学広報誌「熊大通信」を創刊する運びになりました。学内のさまざまな事柄、ニュース、考え方を学内外の多くの皆様に知っていただき、大学に寄せられる関心と要望に応えることができると期待しています。

創刊号では、県行政にご精励の潮谷義子知事と江口吾朗学長にご対談いただきました。本誌は読者のためにあるもので、忌憚のない意見、ご批判をいただき、充実したものに発展させていきたいと考えています。ご支援をよろしく願います。

副学長・広報委員会委員長 宮本英七



P.16



P.12



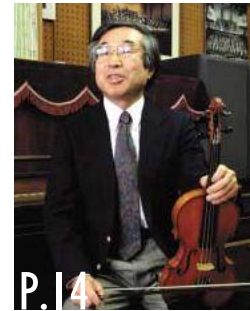
P.2



P.18



P.10



P.14

C O N T E N T S

<目次>

特別企画 VISION 21 創刊記念対談

潮谷義子 熊本県知事
江口吾朗 熊本大学長

P.2

知と社会 Vol.1 発生医学

～理学と医学の融合で
“生命”を読み解く～

P.10

熊本大学に聞いてみたい!!

P.12

熊大群像 「熊本にオーケストラ活動を根付かせていくのがライフワーク。」

熊本大学教授 山崎 崇伸

P.14

OB・OG訪問 「弁護士らしい自分になるより、自分らしい弁護士を目指して」

田中法律事務所 中松 洋樹さん

P.16

国際交流事情 KUMAMOTOから世界へ

～国際総合大学としての熊本大学～ ～グローバル・スタンダードをめざして～

P.18

熊大 INFORMATION

P.20

VISION
21

創刊記念対談
潮谷義子 熊本県知事
江口吾朗 熊本大学長

熊21世紀の豊かさあふれる 本をめぐして

21世紀はさまざまな変革の中で幕を開けました。情報通信技術「IT」をキーワードに、世界的な規模で、ひと・もの・情報の交流が加速し、社会、経済、政治のシステムがグローバルな視点での再構築をせまられています。国境を越えたグローバル・スタンダードが求められる一方、地域社会に根を下ろした個性的なローカルティーもまた、21世紀の重要なキーワードでしょう。

熊本県では昨年6月、21世紀初頭の県政の

指針と

なる新

しい熊

本県総合計画「パートナーシップ21くまもと」

を策定し、「県民が主役」の県政を進めています。

総合計画に掲げられた「パートナーシップ」

とは男性と女性、行政と民間、行政と大学など、

お互いの特性や個性を生かし手をとりあつて

歩いていく未来を象徴する言葉です。

県政運営2年目に入った潮谷義子熊本県知

事と江口吾朗熊本大学長、行政と大学それぞ

れのトップに、21世紀の熊本がめざす真の豊

かさ、そして互いのパートナーシップについて

語っていただきました。

21世紀を迎え 熊本のめざすものは

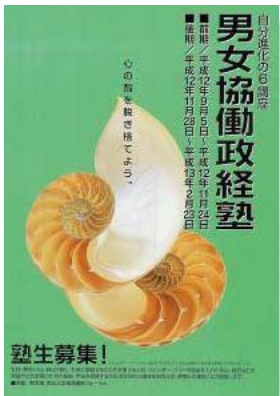
知事 先生に座長を務めていただいた総合計画委員会の意見答申をいただき、昨年6月に新しい県総合計画「パートナーシップ21くまもと」を策定することができました。また、先生には県の審議会などでも何かとお世話になつておりまして、先日男女共同参画の一環として開催した「男女協働政経塾」では、熊本大学の地域連携フォーラムの皆さんに企画から運営まで力を貸していただき有難うございました。

学長 こうした試みは、まさに大学と行政・民間が手を結んで取り組んだケースですし、これからも積極的に進めていきたいですね。

司会 今回は、行政と大学のトップが顔を合わせるビッグ対談ということで、内容の濃いお話がうかがえるものと楽しみにしております。

学長 私が最初に知事にお会いしたのは私が熊本に赴任した直後ですから平成8年でしたか。

知事 わたしはいつも先生のお話をうかがうのがとても楽しみなんですよ。



なにせ博識でいらつしやるし、お話が上手なんです。

学長 いやいや、話し始めると止まらなだけで(笑)。夢中になると名古屋弁や関西弁が飛び出しますが、ご容赦を。

豊かで実りある パートナーシップを

知事 学長に座長を務めていただいた県総合計画は、21世紀初頭の熊本県の方角を示す指針となるものです。時代がどのように大きく変革していく中で、柔軟な思考や対応を行政も意識していかなければならないと思つています。県民や地域のさまざまなニーズに対応していくことは、そのすべてを行政だけでできるものではありません。県民の皆さんや企業、大学などの研究機関とも連携・協力しながら進めていくことが必要だと考えています。そういった意味からも、計画のキーワードとして「パートナーシップ」ということを掲げています。特に、大学などの高等教育機関との連携は人材育成や、地域づくり、福祉などあらゆる分野でますます重要になってくると考えています。熊本大学にはその中核となつていただきたいと思いますので、今後ともご協力をよろしくお願ひします。

学長 私は今回の総合計画の座長をおおせつかりまして、この計画に掲げられた「パートナーシップ」という言葉には二つの意味があると思つています。一つは、行政を支えるのは県民一人一人の税金ですから、納税者である県民と行政との密

なパートナーシップを作り上げていくことが大切だということ。大学も同じで、特に国立大学の場合は国の税金で賄われていますから、納税者である国民が大学に何を期待しているのかということ

を常に考えながら、大学運営を進めていかなければならない。そういう点では行政も大学も同じような立場にあるわけですね。もう一つは、行政機関が大学はもとより行政機関以外の組織体とどんな具合に連携して、社会に貢献していけるだろうかという点です。知事が標榜なさっている「パートナーシップ」には、この二つの意味が含まれているのだなあと、私なりに理解していますが、いかがでしょうか？

知事 まったく、先生のおつしやる通りです。特に二つの納税者という点では、次のステップとして私を取り組んでいる、「パブリック・コメント」にも相通じるものがあります。つまり、県民の生活に広く影響を与えるような県の基本計画や条例などについて、素案の段階からご意見をいただき、それを実際の県の施策に生かしていきたいと思つているのです。当事者参加ということを、これからの県政では今以上に大事にしていきたいと思つています。もう二つの連携に関しては、行政も大学も、熊本県をもっと良くしていきたい、もつと元気にしたいという願いは共通です。それぞれの特長や特質を生かして意見を出し合い、お互いの責任と義務の上に立つた連携が必要だろうと思つています。座長を務めていただいた総合計画の中には、そういった連携の意味と必要性とが、過不足なく盛り込まれ

ていると自負しております。

新世紀 大学も変革の時代へ

司会 大学を取り巻く環境は今大きく変化しています。少子化によるいわゆる大学全入時代への対応や、国立大学の独立行政法人化への移行も迫っています。大学も良い意味でのサービスや社会へのアピールが必要な時代になったと言えませんか？

学長 確かに、大学の在り方が今ほど厳しく問われている時代はないでしょう。最近よく「開かれた大学」という言葉を使いますが、私はもともと大学とは、地域の人々と共にあるものだし、当然開かれていくべきものだと思つています。それを改めて問われること自体、我々は大いに反省しなければなりません。特に、最近の大学では、地域化と国際化が同時に起こっているのが現状です。熊本大学は約4割が地元出身の学生で占められています。彼らを地域社会の担い手として育てるといふ使命が大学にはあるわけです。と同時に、年々地球は小さくなつていきます。通信手段、アクセス情報網などによつて瞬時にして地球の裏側のことを知ることができるようになりました。高等教育機関としての大学は、地域化と国際化を同時に体現しているわけです。

司会 狭くなった地球、密接な関係を結ぶ地域。その両者への貢献が求められるわけで、大学にとつても大変な時代ですね。

学長 大学は地域や社会に積極的に貢献すべきものです。平成12年度に策定された熊本大学の理念・目標の中にも、「熊本大学は教育基本法及び学校教育法の精神に則り、総合大学として、

知の創造、継承、発展に努め、知的、道徳的及び応用的能力を備えた人材を育成することにより、地域と国際社会に貢献することを目的とする」とちゃんと掲げられています。地域が大学に期待する担い手作り、人材育成にも力を入れながら、多様な国際社会の変化に常に対応できる国際競争力の強化も求められているわけです。熊本大学では、大きく「教育」、「研究」、「地域貢献・国際貢献」の三つを大学の目標として挙げ、その方向性を定めています。

司会 国でも、行政や企業などが参加した委員会を設置して、国立大学の方向性やこれらについて検討を進めていますね。

学長 私もそのメンバーの一人ですが、大学はまず地域に貢献しなければならぬというのが私の持論です。その上で、そうした地域貢献が結果として国際的評価に結びついていくのです。例えば、熊本の地場産業であるイ草を使った新しく利用価値の高い商品開発を大学などの研究機関と地元が一緒になって進めていけば、当然、世界へとより広いマーケットを獲得することができますでしょう。また、それが地場産業の新たな方向性を示すものにもなるかもしれません。ローカルな特色を生かして国際的に評価され得るレベルまで高めていくこと、そのために、大学は地域の頭脳になるべきだ

と私は考えています。それが大学の国際的な評価へとつながっていくわけですから。

役割を生かす社会人教育 ひいては 生涯学習の振興を

司会 平成12年5月には学内に生涯学習教育研究センターを設置され、生涯学習の拠点整備も進んでいますね。

学長 大学での研究成果を地域社会にフィードバックしてゆくシステムの構築が、これからますます重要になると思われます。

知事 県としても生涯学習の中核となる施設として「県立生涯学習推進センター」を平成14年度のオープンをめざして最終的な準備を進めているところです。また、ここでは県内の大学など高等教育機関の協力もいただきながら「くまもと県民カレッジ」を開催する予定です。熊本大学にはその中心的な役割をお願いしたいところです。熊大の「生涯学習教育研究センター」と、県の「生涯学習推進センター」とが協力し連携しながら、パートナーシップを発揮していければと願っています。

司会 特に、社会人教育などの面では県として熊本大学にどういうことを期待されていますか？

知事 大学を卒業して社会人となった人たちが、時代の変化の中でより研究を深めたいと思う場面が今後さらに増えてくると思います。私は、実践と理論



Goro Eguchi

■略歴

- 昭和32年 5月 名古屋大学理学部生物学科教務員
- 34年10月 同 助手
- 39年 8月 理学博士（名古屋大学）
- 43年12月 京都大学理学部生物物理学助教授
- 51年 9月 名古屋大学理学部分子生物学研究施設教授
- 58年 2月 岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所教授
- 平成元年 4月 総合研究大学院大学教授（併任）
- 8年 4月 同生命科学研究所長（併任）
- 11月 熊本大学長

地域の頭脳になり、地域に貢献すること
それが大学の国際的な評価へと
つながっていくのです

は常にリネージュしていかねければなら
ないと思つていますから、今後、熊本大
学の役割として、「リカレント」を受け入
れていくことが大事になつてくると思つ
ています。さらにオープンキャンパスもよ
り充実していただきたい。社会人教育
はこれからますますそのニーズも高まっ
ていきますし、重要度も増していきでし
ょう。また、臨床場面に出ていられるよ
うな、心理学や法律の学生の皆さんには、
ぜひとも現場での実習を多く取り入れ
ていただきたいですね。理論と実習がリ
ネージュすることで、大学と社会がつか
ながつていくことにもなるでしょうし、よ
り実践的な専門性も身につくと思いま
す。

学長 熊本大学でもやつと生涯学習教
育研究センターが立ち上がりましたが、
私は基本的に、大学での生涯学習と行
政の生涯学習との機能的役割は異なる
と思つています。大学が最も大事にしな
ければならないことは、アカデミズムを
広く活用していただくということです。
生の研究現場に触れていただく、それが
大学での生涯学習教育研究センターの
役割だと思つています。大学はカルチャ
ー・スタイルではありません。真のアカデ
ミズムを大事にしていくことが大学の役
割なのです。大学として本来やらなけ
ればならないことは何なのか、それをし
つかりとつかんでおかないと、大学でやる
生涯学習は中途半端なものに終わる危
険性があります。

知事 確かに、そうだと思います。先生
は今、アカデミックな場の役割についてお
話しになりましたが、それは言い換えられ

ば、知的品位を持つ大切さだと思います。
品位、なんて言うと誤解されるかもしれ
ませんが、大学での生涯学習は、大学
が蓄えてきた知的財産を一般の人々が
享受するという点に特徴があります。
つまり、それを学ぶ側は、知的品位を高
めていくといったことが目的になると思
います。一方、行政が主体となつて行う
生涯学習では、趣味のサークルをさらに
レベルアップしたり、仲間作りやコミュニ
ケーションを深める、また学んだことを
自分の生きがいつくりや社会参加活動
に生かすといった多様な目的がありま
す。それだけに大学の高度なかつ専門
的な学習を求めている人も多いのです。

司会 そういった生涯学習の棲み分け
が、社会人教育の浸透にもつながつてい
くのでしょうか。

知事 当然、役割分担があつてしかるべ
きですし、違う個性を持つているからこ
そ相乗効果が生まれてくるのだと思ひ
ますよ。

大学と地域との連携で 「環境立県くまもと」を

司会 地域の固有のテーマについて研究
していくことも、大学の地域貢献という
点からは大事なことではないでしょうか。

学長 そういった意味からは、新設した
「沿岸域環境科学教育研究センター」
などは地域性の強いものではないかと。こ
れは沿岸域の環境について総合的に研
究しようという研究施設です。有明海
や八代海は、太古の昔から人々の暮らし



Yoshiko Shiotani

■略歴	
昭和37年 4月	佐賀県社会福祉主事
39年 1月	大分県社会福祉主事
46年 9月	社会福祉法人ねむの木学園ソーシャ ルワーカー兼保母
47年 4月	社会福祉法人慈愛園乳児ホーム勤務
59年 5月	社会福祉法人慈愛園乳児ホーム園長 (平成11年3月15日退園)
平成11年 3月16日	熊本県副知事 (平成12年3月15日退職)
12年 4月16日	熊本県知事

環境教育とは、命の教育だと思います
幼い頃から、環境への畏敬の念を
育てていくことがとても大事

と共に生きてきた海です。そうした環境と人間との関係を維持するためには、単に海の生物だけを研究しているだけではだめで、工学や社会・経済学などさまざまな分野を結集して、より総合的に新しい発想で研究を展開していくことが必要です。そして、そこから得られた成果を現場に生かしていくことが重要になってきます。最近問題になっているノリの不作なども、こうしたセンターの研究成果が、いずれは生かせるようになるだろうと期待しています。

知事 有明海や八代海では赤潮発生などによって漁業への深刻な影響が出ています。特に、有明海は地図上で見ると胃袋のような閉じた形をしています。そう、そういう内海の環境をどのように守り保全していくかについては、科学的、理論的に構築していかなければならない時期にきています。かつては自然の浄化能力に委ねられていたものも、今では難しくなっていますから、県としても、こうした沿岸の環境については、新設されたセンターの研究成果を心待ちにしています。ノリの問題もそうですが、赤潮の問題についても、将来的には、研究機関が地域と連携しながら原因究明や新たな提言をなされることが望ましいですね。新しい海の保全創造という

点での貢献を大いに期待しております。
司会 環境問題に関しては、熊本県の総合計画の中でも「郷土の安全と環境を守るプロジェクト」を挑戦プロジェクトとして掲げて、熱心に、積極的に取り組んでいらっしゃいますね。

知事 県民一人一人が、また行政や企業が率先して環境への配慮を行っていく「環境立県くまもと」の形成に向けた取り組みを進めています。先日そのシナリオとなる新たな環境基本指針・基本計画を策定したところです。具体的には、熊本の貴重な資源である地下水を守るための熊本地域地下水保全事業支援システムや、環境にやさしい農業・漁業の推進、廃棄物の減量化、学校や地域と連携しながら環境教育を進めていくことも重要だと考えています。環境問題の中ではまだまだ未解決なものも多くあります。解決に向けて、研究機関である大学にはぜひとも協力、ご支援をいただきたいと思っていますし、行政と大学が連携しながらやっていける部分も、たくさんあると思います。

学長 私は環境の基本は教育だと思っています。なぜかと言うと、もともと人間というのは環境を破壊しなければ生きていけない生き物なのです。人間の営みというのは、ある意味で環境破壊なのです。よく言われるように「環境と共生する」なんていうのはおこがましい限りです。もっと謙虚に、人間の存在そのものが環境をいかに痛めつけているか、そのことを真摯に受け止め、理解することから環境問題は始まるのです。人間が環境に受け入れてもらえるために



はどうすればいいか、そのことをしっかりと考えておかないとだめでしょうね。そのために幼い頃からの環境教育が必要だと思っています。大学でも、ちよつと遅まきながら、環境教育に力を入れていかなければならないし、大学や研究機関が小学、中学、高校などへのインフォメーションを積極的にやっていく必要があると考えています。

環境教育と 命の尊厳について

知事 私は環境教育とは、命の教育だと思うのです。シブイツァー博士が「命への畏敬」ということを語っていますが、人間が傲慢になっていくと自分たちの利便性だけのために環境を利用しようとしています。環境というのは決して人に優しいだけのものではありませんよね。時には人に危害を加えたり、キバをむく恐ろしい面も持っています。そうしたことを幼い頃からしっかりと教え込んで、環境への畏敬の念を育てていくことはとても大事なことだと思います。

学長 おつしやる通り、その点が最も重要だと思えます。環境と共生するなんておこがましい話で、人が環境に受け入れてもらえるかどうかなんです。都市型災害などを見てもみますと、これからは自然環境を人間の手でいろいろ作り変えるのではなく、安全な場所に人間の方が移動していくことだとして考える必要がありますよ。そうした発想の転換こそが、これからの時代は大事な

んじゃないでしょうか。

知事 環境問題については、メカニズムとしてまだ解明されていない点を大学などの研究機関に明らかにしていただくことが大事ですね。環境問題を考えた時に、研究としてずっと続けていかなければいけない部分と、政策課題として行政が対応していかなければならない部分があると思うんです。この二つが連携することが非常に大事で、大学と行政が手を取り合うということは、より質の高い環境を私たちが考えていくための重要な視点だろうと思います。そういった意味で、大学の新しいセンターを含めた取り組みには、熊本県としても大いに期待しているところです。

21世紀の地域ラボとして 大学のあるべき姿とは

学長 大学というのは50年後、100



(左) 衝撃・極限環境研究センター、サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー
(上) 上記センターの久保田教授を中心とした共同研究により開発された超精密高速ステージ



年後を見据えて、その時々の方が社会が必要とする人材を育て、知恵を蓄えておく場所なのです。大学の研究というのは、より基礎的なそして一般的な原理を追究していくことが目標です。ですから利益追求型の企業などと連携がとれるかという点、時には難しいこともあるでしょうね。ただし、外部からの問い合わせやニーズにはいつもきちんとして、対応できるシンクタンクでありたいと思っております。

知事 先生が今、大学教育は原理追究型だとおっしゃいましたが、私が学んだ大学の学長は、まさに私たち学生に原理の大切さを教えてくださったんです。その先生はご自分の主義主張ではなく、ソーシャル・ケース・ワークという原理をきちんとして、それに個人がどう向き合っていくかが大事なんだと教えてくださった。まさに、これなんです。教育の基本は、原理さえきちんとしておけば、いかに時代が変わり、法律が変わろうとも、その教えはどんな場面にも柔軟に対応できるんです。そのことに気付いて、大学の教育でこれなんだなと思えました。原理を、学ぶ意味を学生たちに教えるのが高等教育機関だと思っております。熊本大学の先生方はいかがですか？

学長 いやあ、非常に難しい質問ですね。大学というところは、少なくとも教官は総体として基本的には二匹オオカミの集合体だと思っております。一匹オオカミでいいんですが、問題はその視野なのです。

視野の広い一匹オオカミであって欲しい。視野が狭ければ、専門家としては優れていても、協調性や理解力、感受性に欠けます。その大学の評価は、教官の視野の広さによって決まると言っても過言ではないでしょうね。では、熊本大学はと問われると、なかなか学長の口からは答えにくいのですが、幸いにして、視野の広い先生方がたくさんいらっしゃる。これは将来に大いに期待が持てると思っております。

地域社会と連携し 開かれた大学をめざす

司会 教育の問題が生まれましたが、県としては教育機関としての熊本大学に、どんなことを期待されますか？

知事 そうですね、オープン・キャンパスや公開講座の開設といった「開かれた大学」ということも重要ですが、さらに一歩進んで「デリバリー」という考え方もこれからは大切じゃないかなと思うんですが、先生、いかがでしょう。

学長 それは非常に重要なことですね。残念ながら、熊本大学ではまだやっていませんが、これからは積極的に取り組むつもりです。

知事 今の小学校、中学校、高校での学級崩壊や燃え尽き症候群などのケースを見聞きするにつけ、大学がデリバリーという形で知的刺激を与えていただければ随分変わるんじゃないかと思うんです。「学ぶ」とはそんなに楽しいことなんだよ、知的興奮ってこんなにすばらし

いというメッセージを現場から発していただくことが、とても重要な意味を持つと思うんですね。まさに“知の出席”ですよ。大学が社会と接点を持つという点でも、これからぜひデリバリーにも取り組んでいただきたいですね。

学長 知事のおっしゃるデリバリーには積極的に取り組むつもりです。それとは別に、“大学の大衆化”といわれますが、私はこういう言い方はあまり好きではないんです。もともと高等教育機関というのは、国の将来を思い、国際的な活躍をしたいという高い志を持った若者たちに、できる限りの教育を与える場所だと思っています。ところが今では、志の有無にかかわらず、誰もが大学に行く時代ですね。いろんな若者たちを受け入れながら、いかにそれぞれの志を伸ばしていきけるかが大学の大きな課題です。今、教育現場で一番欠けていることは、“なぜ学ぶのか”という根本的なことを教えないということなのです。

知事 日本は学歴を積むことには非常に熱心ですが、学力を耕すことは少しおろそかにしてきたのではないのでしょうか。最近、子どもたちの“理科離れ”がよく言われますが、学ぶことの楽しさから子どもたちが少し遠のいているような気がしてなりません。

学長 これからの教育改革は、教える側の教育です。教育改革は、子どもたちに学ぶ楽しさを教えられる教師を育てていくことに尽きると思いますよ。教育技術者ではなく、真の教育者の育成が、大学にとってもこれからの大きな課題でしょう。



IT講習会は熊本大学内総合情報処理センターでも開催されました

IT時代に向けて 地域連携の強化を

司会 熊本県でも「NEXT熊本」が設立され、行政、民間、大学など分野を横断した活動が目立ってきていますね。

知事 ITは、まさに産・学・行政の連携が効果を発揮する分野です。いわゆる「IT革命」といわれる情報通信技術では、すでに行政と大学などの研究機関との連携が欠かせないものになっています。熊本県では昨年7月に「熊本県総合情報通信高度化プラン」を策定して、県をあげてのネットワークの整備を進めているところです。ITを活用した社会サービスなど、これから生まれる新しい動きにどのように対応し、地域での情報化の取り組みを支援していくのか、研究機関である大学のご支援をお願いしたいところです。

学長 ITというのはかえって発展途上国の方が今進んでいます、東南アジ

ア各国などを視察に行きますと、日本は立ち遅れているなあと実感します。**司会** これからITなどの分野では特に大学などの先端的な研究を現場の企業や産業界にどう反映させていくかが重要になってくると思います。

知事 企業への技術移転の動きは最近とくに活発ですね。熊本県では、熊本大学を中心に県内の大学が連携して「熊本TLO」を立ち上げることとしています。産業界と大学など研究機関との連携がさらに進むことで、より大きな効果が発揮できるものと期待しています。

国際競争力をつけて 地球規模での活動を

知事 ITの分野もそうですが、日本はもっと広い視野で、よりボウダレスな視点で取り組んでいくことがこれから必要ではないでしょうか。そういう点では国際化が今後の大きな課題になりますね。

学長 おっしゃる通りですね。ITに関しては、全地球規模でやつていかないと二歩も前へ進みません。国際的、トランスナショナル(国家横断的)でなければならぬというの、ITもこれからの大学も同じです。

司会 国際化という点では、熊本大学はかなり力を入れておられますね。今後5年間で、学内の留学生を二挙に1.5倍に増やすという計画を最近発表されて、話題をよんでいます。

知事 国レベルでもかなり大掛かりな留学生の受け入れをするようですが、学生の国際化という点では、熊本大学が他の大学に先鞭をつけていらっしゃるなあという感じですね。

学長 私たちが最も腐心しているのは、留学生をいかに大切に、厳しくするかということ。留学生たちが熊本大学で数年間を過ごして母国に帰り、「熊本で学んで本当によかった」と言ってくれば、必ずや後輩たちが後に続くれるでしょう。そうやって増えていくことが理想であり、本当の国際化だと思うのです。さらに、留学生の出身国が今はアジア、なかでも中国に集中していますが、将来は世界中の国々から熊大にきてくれるようになればと願っています。大学の魅力が高まれば、自然と増えていくと思います。

司会 そうした熊大の動きが、県の国

県内大学 留学生を積極受け入れ
政府が倍増計画 生き残り対策も

熊大5年で1.5倍に 海外でもアピール

際交流にも良き波及効果を与えるのでは？

知事 それは当然あるでしょうね。姉妹友好提携もアメリカ、中国、韓国の3地域と結んでいますし、行政だけでなく民間、企業、NGOなどそれぞれの個性を生かした国際交流が進んでいます。また今年の9月には第4回APEC人材養成大臣熊本合合も熊本市で開催されますし、そうしたことをきっかけに熊本の国際交流が広がっていくでしょう。なと願っています。

創造にあふれた豊かな熊本をめざして

知事 私は仕事として長く赤ちゃんと関わってきました。いわば「命」と身近に接して仕事をしてきたわけです。先生も、生命が形成される過程を探求する生物学がご専門です。先生とこうして教育や環境、ITなどのお話をしている、私がつくづく思うんです。やっぱり命の教育って大事なんだなあって。生物学や生理学をきちんと学ぶことが、今ほど必要な時代はないと思います。

学長 生物学では人間のことを力タカナで「ヒト」とよびます。人間も生き物の一種なのです。そうした発想が少し欠けてきているのかなと感じます。

知事 専門家を目の前にしてちょっと言いにくいのですが、幼い子どもたちが成長していく時に、快と不快の中から五感を大きく発達させていくんです。五感が広がるといことは、学ぶことすべ

ての基礎になります。親たちは学べ、学べと勉強のことがばかり言いがちですが、本当はそのベースとなる五感の発達こそ大事なことです。子どもをギュッと抱きしめる、ほおずりする、肌に触れる、手を握る……そんな親子の何げない接触が、子どもたちを広い世界へと羽ばたかせていくのです。かつては伝承として、出産や育児の現場で自然に学び伝えていた命の教育が、今では途絶えてしまっています。命を学ぶことは、生物としての人間を学ぶことでもあるんです。ですから、どうぞ熊本大学でも、若い学生たちに先生のご専門である生物学を含めて命の尊さや重さを教えていただきたいと思えます。

学長 日本では幼稚園から大学まで、ヒトについての教育をすっかり怠ってきましたからね。最近では遺伝子工学などへの関心が高まっていますが、もっと基本的に、人間とはどんな生物なのかを知っておくことは、専門分野に関わらず必要なことだと思います。大学からぜひそうした命の教育に力を入れたらいいと思いますし、デリバリーで学外へも発信していきたいですね。

知的創造性をのびし活力ある熊本を

知事 これからの産学・行政のパートナーシップがより豊かな実りを生むためには、お年寄りから小さな子どもたちを含めたところでの、創造性にあふれた行政展開が大切だと思います。特に、

これからの高度情報化社会では「なぜ、学ぶのか」といったスタンスが定まらないと、将来必ずどこかで行き詰まってしまうでしょう。

司会 これからの高度情報化社会の中では、体何が求められるのでしょうか。

知事 県の総合計画の基本目標に「創造にあふれた、“生命(いのち)が脈うつくまもと」と掲げていますように、子どもたちの中にいきいきとした創造や体験があつてはじめて、創意工夫の意欲も生まれてくるのです。自分で目標を持つて進んでいくこと、変化を体感することもとても重要なことです。今の子どもたちの状況を見て、高度情報化社会の行方を考えて、家庭で、地域で、大学での創造にあふれた教育といった観点が非常に大切なのではないかと感じます。熊本大学には、これからも知的創造性の牽引役としても、大いに期待しております。

学長 知事がおっしゃった「命の教育」や創造性を含めた幅広い人材育成が、今、大学には求められていると思います。生涯学習や社会人教育など地域との連携を深めながら、一方で、国際競争力をつけ、専門性を高めていくことも必要でしょう。大学の研究成果やアカデミアムが地域の活性化を促し、大学も地域からどんどん知的刺激を受けていく、そんな関係が大学と地域社会との望ましい姿だと思います。これからの大学が地域と国際社会に対してどんな貢献ができるのか、そのことをしっかりと考えていきたいですね。

※1 リカレント…：帰郷教育、循環教育などとしてされるこの理念は、青少年期という人生の初期に集中していた教育を、労働や余暇などの諸活動と交互に行われる形で全生涯に分散させようというもの。

※2 デリバリー…：要請にもとづいて、地域でセミナーを開催するいわば出張講座。

※3 NEXT熊本…：熊本県次世代情報通信推進機構。熊本県内の高度情報化を推進する産学・行政連携の活動組織。

※4 熊本TLO…：熊本県の企業に大学の研究成果である特許などの知的財産権を技術移転し、産業活性化を図るのが狙い。九州テクノセンターと産学連携機構九州に継ぐ、九州で3番目の承認TLOをめざしている。

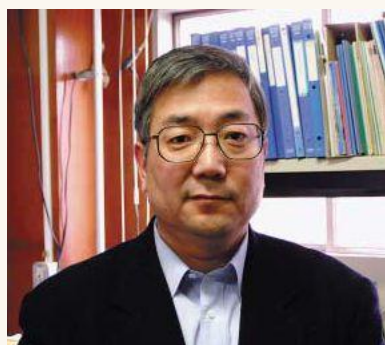
※5 APEC…：アジア太平洋経済協力会議。この会合の地方開催は熊本が初めて。また、熊本にとって初めての大規模な政府 間会合。

●インタビュー
中村ひろみ◎福岡市生まれ。熊本大学文学部卒業。
FM福岡パーソナリティー、CATVキャスターを経て、
'83年～'85年 RKB毎日放送ラジオ番組制作担当。
'85年～'91年 RKB毎日放送テレビ報道部記者、教育・医療問題担当。
'91年～'93年 RKBワイド番組企画・構成。
'92年～'94年 TKUテレビ熊本「スーパータイム」キャスターを担当。





発生医学



お話をうかがった須田年生センター長

「理学と医学の融合で
”生命“を読み解く」

人の体はどつやどつやできるのか

人類誕生以来、人が抱いてきた大きな夢。それは、人の体はいかにしてできるのか、その仕組みを知りたいという“夢”でした。さらに、類い稀な創造物であるこの人体を自らの手で再生したいという“夢”へとつながっていきます。

20世紀後半、科学の進歩によってその夢は実現へと大きく近づきました。生命科学の分野では、遺伝子レベルでの研究が進み、間もなくヒト遺伝子の構造解析が終わろうとしています。その先には、「遺伝子がどのようにして動物の体作りに関わっているのか」、また「その体の機能と遺伝子がどう結び付いているのか」という大きなテーマがあります。それは人体の組織や機能を研究対象とする医学の分野とも密接に関わってくる問題です。

平成12年4月、熊本大学医学部附属遺伝発生医学研究施設を母体とする「発生医学研究センター」が新設されました。ここでは、まさに人類の夢を解き明かそうという研究が行われています。

国をあげて新分野の研究を推進

ヒトの体は約60兆個の細胞でできています。もともとはたった一つの受精卵から、分裂増殖を繰り返しながら胎児となり、皮膚や骨などの組織や、心臓、肝臓などの臓器が徐々に形作られていきます。このような過程を「発生」と呼び、その過程で細胞が組織や臓器などを形作る細胞に性質を変えることを「分化」といいます。

21世紀においては、体、臓器、組織の成り立ちに関する発生学的視点を医学の基盤として導入することが欠かせない重要なテーマとなってきました。「発生医学」は、受精卵から動物の体ができるまでのメカニズムを解明する発生学と医学とを高いレベルで結びつける新しい分野として期待されています。

日本でも昨年度、ミレニアムプロジェクトとして国内四つの研究拠点を整備し、発生医学の研究推進に力を入れています。全国拠点の一つとして熊本大学の発生医学研究セ

ンターでは、分子レベルで個体発生のメカニズムを明らかにしようという基礎研究が進められています。

センターでは、(1)ヒトの受精から胚形成までを研究する「胚形成部門」、(2)胚から各器官の形成までを研究する「器官形成部門」、(3)これらの研究をヒト組織の再構築に応用することをめざす「再建医学部門」の3部門合計12の専任分野と3客員分野で構成され、教授、助教授、助手ら専任教員31人、若手研究員約40人、大学院生約50人が研究にあたっています。平成13年度には新設された「再建医学部門」では、日本では初めて「ヒトES細胞」の研究に取り組むことで新たな注目が集まっています。

「再生医学」と社会への還元

「クローン」という言葉を最近よく耳にするようになりました。クローン羊、クローン人間、クローン臓器…。そこには人類の個体再生への飽くなき「夢」が表れています。

皮膚や骨などの組織や、機能をなくした臓器を取り戻す。こんな夢のような医療が「再生医学」です。「再生」医療は、臓器移植に代わる最先端医療の切り札とも言われています。移植医療で大きな問題となるのが、異物を排除しようとする免疫システムとそれによって起こる拒絶反応です。これを患者と同じ遺伝子を持った臓器や組織を作り出すことで解決しようというのが、「再生医学」の二つの考え方はです。

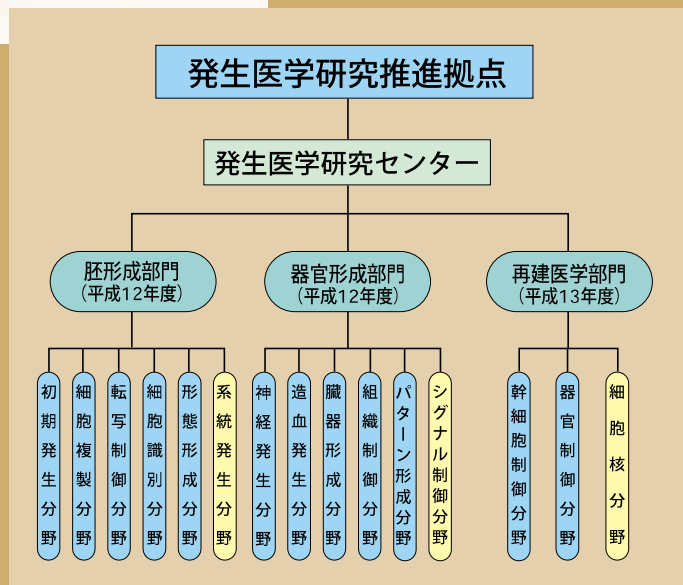
“再生”のカギを握るのが、体を作るどんな細胞にも変化できるヒトの胚性幹細胞(ES細胞)です。万能細胞とも呼ばれるES細胞は、受精卵や胎児の細胞をもとに作られます。

人間の体は、ひとつの受精卵が分裂を繰り返しながら成長していきます。その中でそれぞれの細胞は心臓や神経、筋肉になるように運命づけられています。約60兆の細胞の二つがオーケストラの各パートのように協調し、共鳴しあつて作りあげられているのが私たちの体なのです。万能細胞とは、その中でこうした運命が決まっておらず、環境に応じてどのような細胞にも分化できる能力をもった

特殊な細胞なのです。

医療倫理の問題をめぐって

熊本大学の発生医学研究センターでは、本年度からヒトES細胞の分化や神経発生、臓器形成などの研究を本格的にスタートさせました。すでにマウスを使った研究では、造血幹細胞を移植し、新生させることで心筋梗塞の患者



の治療に新たな道が開かれようとしています。

ヒトES細胞は、体外受精の際に余った受精卵から胎児になる可能性があるものを利用して作られます。また、人間の細胞から皮膚組織や臓器などを作つて患者に移植する再生医学には、クローンと同じ技術が必要になるため、医療倫理の問題が指摘されています。

熊大の発生医学研究センターでは、生命倫理を他の研究テーマと同じように力を入れているのが特徴です。生命倫理に詳しい三菱化学生命科学研究所の勝島次郎、主任

研究員を2年間の任期で客員教授として招聘し、ヒトES細胞の生命倫理に関する研究を進めています。昨年夏からは約2カ月に1回セミナーを開いて、医学、生物学だけでなく、教育学、哲学、法学の研究者と一緒に「発生医学と社会」をテーマにした討議を重ねてきました。

そうした中で、ヒトの臓器や組織をパーツ(部品)のように交換可能なものとみる医療観や生命観には立たないこと、「あくまでも生物の体ができるメカニズムの解明が研究の目的」であることを確認しています。

新たな可能性を求めて

ヒトのES細胞はその応用範囲の広さでも注目されます。たとえば、ES細胞を臓器などを形作る特定の細胞に分化させ、さまざまな化学物質に対する反応を調べれば、薬としての効果や副作用の有無を素早く判定できます。また、現在根本的な治療法がないパーキンソン病などの難病に対して、新たな福音をもたらすことも期待されています。

首相の諮問機関「科学技術会議」の生命倫理委員会では昨年3月、国の審査などを条件に、ES細胞の研究を認めました。熊本大学は国のガイドラインに沿って生命倫理に関する基準を設け、医学部倫理委員会に諮りながら研究を進めています。

「人の体はいかにしてできるか」を問う発生医学は、人体の謎と神祕に迫るものです。それだけに、遺伝子治療、生殖医療などと共に、社会との関わりの中で研究者自らが積極的に情報を開示し、広く論議を重ねていくことが必要でしょう。

人の命の本質に深く関わる「発生医学」。そこから私たちは、人知の及ばぬ生命の不思議さ、命の尊さを学ぶことができます。それは、文学や哲学、教育学などが問い続けてきた「人間とはなにか」といった永遠のテーマとも結び付くものです。最先端の技術や方法論と古来からの生命観とが融合した21世紀を拓く新分野、それが「発生医学」です。

熊本大学に聞いてみたい!!

創刊号トップバッターは熊本県立済々高等中学校3年の3人です。高校生の関心事はやはり大学・学部・学科選択のようです。今回の3人は工学部の土木・建築系の学科をめざせばいいと漠然と思っているものの、将来の進路のこと、実際どんなことを学ぶのかなどが気になっているようです。そこで環境システム工学部の石原修教授と大谷順助教授を訪ね、いろいろ聞いてみました。

Q 瀧本 インテリアデザイン関係を希望しているのですが、建築系に進みたいのですが、実際にはどういう勉強をするのですか？

A 石原 建築系では、快適な執務空間や生活空間の創出、安全性や耐久性の向上、環境やエネルギーに配慮した地域づくりなどに必要な技術・知識を学びます。造形やデザインがあたり、模型を作ってデザインや構造の勉強をしたり、コンピュータを使って、デザインや構造、風や温度の流れなど、色々なシミュレーションを学ぶんですよ。また、建物だけでなく、地域や都市の生活環境を調査・研究し、将来像をプランする分野もあるんですよ。

熊本大学の印象

とにかく近いので一番身近な大学（同級生のお父さんが熊大の先生だったりも珍しくない）。知り合いが多くいて楽しそう。

地域と熊本大学をダイレクトに結び体験企画に参加してみませんか？

Q 西澤 私は将来、航空管制官になりたいと思っています。それで大学で学ぶなら、大気や水のことを勉強したほうがいいから物質生命化学科だと思っていますが…

A 石原 物質生命化学科では、先端化学技術や材料、そしてバイオ関連の勉強をすると思いますよ。大気の動きや水の動きなどを勉強したいのなら、環境システム工学科の方が近いと思います。大学のホームページも開設されているので、色々な学科の教育方針やカリキュラムなどを見て、志望学科を選ぶようにしないと、後で思っていたのと違うことになってしまいますからね。

Q 菅原 土木の仕事をしたのですが、熊本大学では環境システム工学科という名称ですね。学科にもコースにも土木という言葉が使われていませんか？

A 大谷 土木環境系は、社会基盤である道路や橋、港湾、ダムなどを計画・設計・施工するために必要な土木環境の知識と技術を学びます。

環境共生工学コースと環境構築工学コースの2つの土木系では、例えば破壊機で岩盤を破壊しC工スキャンで亀裂を調査したり、河川や海の大規模な模型を作って潮の流れにどんな特性があるのかを研究したり、当然、構造物の設計なども行います。大きな構造物を造る土木は、自然環境と密接に関連してきますから、地質・水質をはじめとする環境を研究する分野、安全な都市づくりのために都市防災を学習する分野など、他にも多彩な分野が含まれているんです。

Q 3人 大学院へ進学する人が多いですね。

A 大谷 最近は学問領域が細分化されていますからね。つけ加えていうと、逆に一つの領域だけでは解決できないという事です。いろんな領域の先生方と連携しながら研究すること、またそういったことを授業にも反映していくことが重要性を増していると思います。また工学部では社会人入学や外国人研究者も増えていますよ。

Q 3人 卒業後の進路はどうですか？

A 石原・大谷 今は約半数が大学院に進み、より専門的な勉強をしています。これは土木・建築分野がより細分化し専門化しているからなんです。卒業後の進路としては、土木系では官公庁が多く、次いで建設会社やコンサルタントなどです。建築系では、建設住宅関連会社や設計事務所そしてエネルギー・設備など多方面にわたっているんですよ。

Q 大学を目指している若い人たちがへのメッセージはありますか？

A 石原 建築といえは建物とか、土木といえは橋といったように、あまり狭く考えないでほしいんです。身近な建設現場から想像するのもいいかもしれません。もっと幅広い領域を学問しているんです。熊本城の公園緑地が私たちに与えてくれる色々な影響だとか、熊本市の水問題だとか、有明海の潮の流れだとか。とても身近で人間の領域なんです。そして一方では、地球的なスケールが研究領域なんです。夢を大きくもってほしいと思います。

環境システム工学部

〈右〉石原修教授
〈左〉大谷順助教授

—(交流が終わって…)先生方は、今回高校生と話していかがでしたか？
生の声を聞いて良かったと思います。最近は、研究室公開や学校訪問も増えてきましたが、残念ながら何となくオフィシャルというか腰を落ち着けて話すまではないと思いますから。



●このコーナーでは熊大を体験してくれる2~3人のグループ(高校生に限りません)を募集しています。

今回の体験者

すがわら ちあき
〈左〉菅原 千明さん

将来は土木関係を希望、お父さんが設計をしているという背景がある。

にしざわ かよ
〈中〉西澤 佳代さん

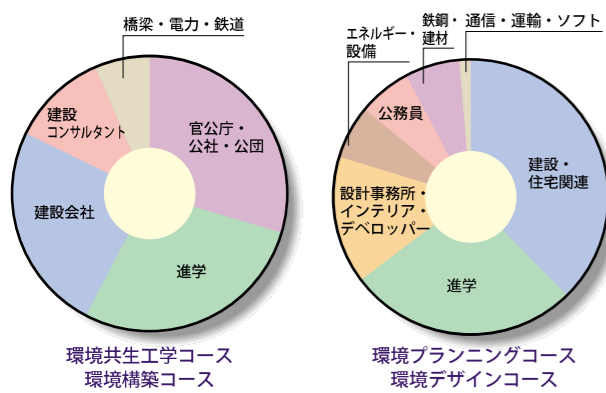
将来は航空管制官になりたい。飛行機が好きだから。

たきもと くみ
〈右〉瀧本 紅美さん

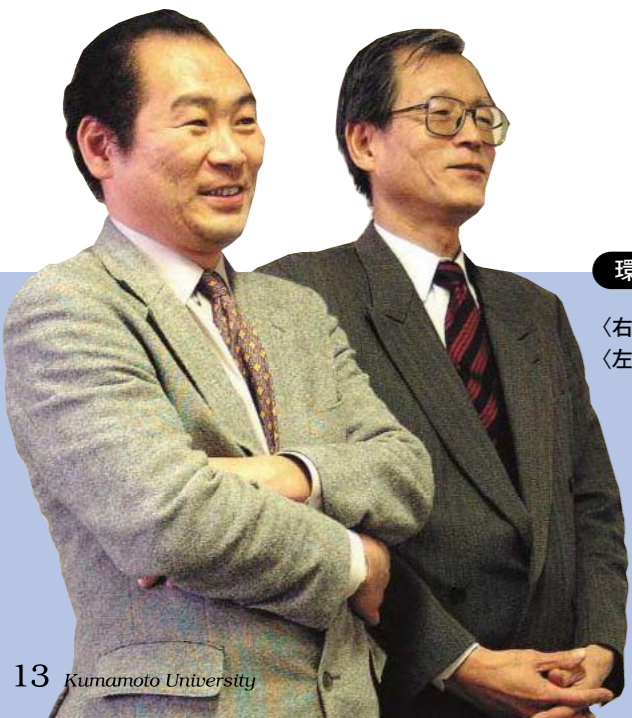
建築、特にインテリアデザインを希望、将来は自分で建てた店の経営をしたいという夢がある。



環境システム工学部 卒業後の進路



—今日の感想はどうですか？
菅原 学科の内容がよくわかりました。地図に残せるような仕事をしたいので土木環境系を目指そうとあらためて思いました。瀧本 土木環境系がどういう勉強をしているのかがわかって、イメージが変わりました。
西澤 土木・建築分野の範囲の広さがわかりました。自分が進みたい道の幅が広がって見えました。
3人 石原先生、大谷先生、ありがとうございました。



熊本大学教授 山崎 崇伸

熊本大学卒。東京芸術大学音楽部委託器楽科（ヴァイオリン）専攻修了。ヴァイオリンを合谷春人、松浦一郎、井崎郁子、指揮を山田雄の諸氏に学ぶ。昭和42年熊本大学着任。現在、教育学部音楽科専攻の教授として学生の教育・指導に当たるほか、熊大フィルを育成・指導し、熊本交響楽団でもコンサートマスターや指揮者、音楽監督を兼任するなど中心的役割を担い、幅広い音楽活動をこなしている。

熊本にオーケストラ活動を根付かせていくのがライフワーク。

本物のオーケストラに出会う機会づくり

昨年8月、熊本大学フィルハーモニーオーケストラの巡回公演が、八代・芦北地区で行われました。昭和42年から県内各地の小中学校でオーケストラのコンサートを開いているもので、この公演で34回を数えます。その指揮を執るのが、山崎教授。35年という長い間、山崎教授に巡回公演を続けさせてきたものとは、何なのでしょ。

「都市部の子どもたちは、比較的オーケストラのコンサートなどを観る機会もありますが、郡部の子どもたちはその機会がずっと少ないと思うんです。郡部の子どもたちにも本物のオーケストラに触れて欲しい、そういう思いで始めました。」

会場となる学校との打ち合わせ、楽器の運搬、百人近い部員の宿泊の手配、費用の管理……。今こそ、部員が役割を分担して行っていますが、当初は山崎教授が監督・指導、あるいは直接行っていたとのこと。大

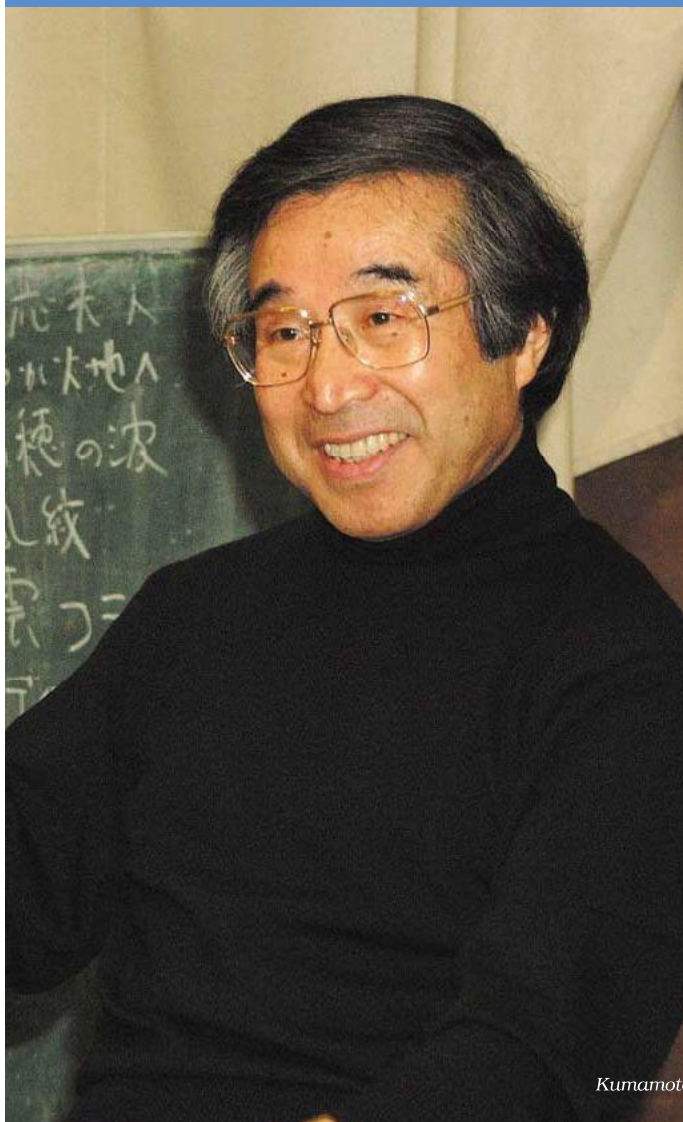
変な労力を要したことが想像されます。

「確かに、毎年巡回公演を行うのは大変なことですが。しかし、子どもたちが目を輝かせて演奏を聴いてくれる。大きな感動と興味を示してくれるんです。実際に熊大フィルの巡回公演を聞いて音楽に興味がわき、熊大に入学してフィルに入った子もいます。私たちの活動が少しでも音楽を広める成果になっていると思うと嬉しいですし、使命感を感じます。だからこそ、大変でもやり続けられるんです。」

恩師の言葉への思い

そもそも、山崎教授が巡回公演を思い立ったのは、学生時代の経験がもとになっています。

「学生時代、国内の他の大学へ学びに行ける国内留学という制度で、東京芸術大学に行かせてもらいました。その時、他県から来ていた学生と友達になり、休みを利用してその人の郷里を訪ねたんです。『せっかく音楽をやる人間があつまつたのだから』





写真上／学生会館内の熊大フィル練習風景。2時間～2時間30分程度で週3回。
写真下／公演を始めてまだ間もない頃。教授も若かった！



と、その地域で演奏をして回りました。会場に来た人たちが、みなさん喜んでくれたのが印象的で。熊大フィルの指導をすることに慣れて、ぜひ各地を回ろうと思うたわけです」。

また、この国内留学の際、山崎教授は当時の主任教授からある思いを託されました。「留学が終わったら必ず、熊本に帰ってきて熊本の音楽界に貢献しなさい」と。実際に東京で学び、山崎教授自身も「情報も、実際の演奏もあふれている東京で、私がいてやることは大してない。それよりも熊本でやることに意義がある。」と感じ、2年間の留学を終えて帰熊。大学を卒業し、指導者として教壇に立つようになり、恩師の言葉を実現するため熊本にオーケストラを広めようと決意。学生時代の経験を生かして、熊大フィルの巡回公演を始めることになったのだといいます。

音楽を通して地域に貢献したい

熊大学生会館の2階ホール。ヴァイオリン、ヴィオラ、コントラバス、チェロ、バ、オーボエ……。さまざまな楽器が並ぶ熊大フィルの前で指揮を執る山崎教授。身を乗り出し、タクトを振る姿からは、音楽への並々ならない

情熱が伝わってきます。

「音楽の魅力は魔物のよう。演奏する喜び、達成感を味わうと止められなくなります。しかも年齢や性別は関係なく、何歳までも演奏ができる。私も参加している熊本交響楽団には80代になつても続けておられる方もいらっしゃる。音楽とは、まさに生涯学習だともいえます」。

そしてまた山崎教授は言います。「音楽は美しいものを美しいと感じる感性を磨いてくれる。豊かな感性の持ち主は、人を傷つけたら、法を破ったりすることはできない。音楽は人間教育そのものだ」と。つまりオーケストラ活動を根付かせていくことは、感性豊かな人を育て、よりよい地域づくりにつながることもあるのです。

「音楽は万人に受け入れられる要素を持つています。クラシックだから特別ということはありません。私は熊大フィルの巡回公演や熊響などでの音楽活動を通し、より広く熊本全体にオーケストラを根付かせることで、熊本の地域文化に貢献したいと思つています。それは私のライフワークなのです」。

音楽活動への熱い思いを語る山崎教授の言葉には、熊本への深い愛情が感じられました。



田中法律事務所 中松 洋樹さん

弁護士らしい自分になるより、自分らしい弁護士を目指して

大学や大学院を卒業し、社会人となった多くの熊大出身者。彼等は今、社会でどのように活躍しているのでしょうか。弁護士をしている法学部卒業の中松さんを訪ね、学生時代や今の仕事について話をうかがいました。



教師になりたくて

—中松さんはどうして法学部を選んだんですか。

中松 僕は以前は、教師になりたと思っていました。法学部でも、教職課程のいく

つかの科目を受講すれば、教職試験を受けられるんですよ。だから二年生の時から教職で「教職資格を取るためには、どの科目を受講しなければいけないか」と聞いたりして、最初は法曹界に入るつもりは全くなかったんです。

ところが、大学二年の時にオートバイで事故に遭い一年間休学。その時、入院していた病院の担当医から「司法試験を受けないの？何をしに法学部へ行くの？」と言われて、加えて、三年生の時に研究室の良永教授から「君たちには野心がない。ぎらぎらとしたものがない。」と言われて、漠然と司法試験を受けようかなと思いはじめました。それで、結局、就職せずに、司法試験の世界に足を踏み入れることになったんです。事故の時に、親を含めて、いろんな人に迷惑をかけ

たので、もう一度迷惑をかけてもいいかという開き直った気持ちも、司法試験受験へと、自分を後押ししたように思います。

それから、七度目の受験で、どうにか、司法試験に合格しました。

想像より地味な仕事

—法曹の仕事には判事、検事など弁護士以外の仕事もありますが、弁護士を選ばれた理由は。

中松 司法試験に受かると、合格者全員を対象に司法修習という研修があるんです。座学の講座と実務修習というのがあり、実務の方で裁判所、弁護士事務所、検察庁を回り、全ての仕事を実際に体験します。この期間に判事か検事か弁護士か、自分の

方向性を決めていくわけです。

それぞれの仕事ごとに内容が違うわけで、私の場合、自分の性格ややりたいことを考えて弁護士の道を選びました。

—弁護士の仕事とは、具体的にどのようなのですか。

中松 依頼者から法的な相談、例えば、お金を貸しているけど返してくれない。どうしたらよいかなどの相談を受けて、事実関係を明らかにして訴訟による解決に適合するものは訴訟します。裁判所は証拠から認定できる事実しか判断しませんから、そ





のための証拠を調べたり、集めたり。また裁判の中では法的な主張は書面で行うので、証拠をもとに訴状を書いたりするんです。

今お話したのは民事事件の例ですが、刑事事件も基本的には同じで、被告人側の弁護人として裁判のための資料などを収集したりします。弁護士というと、颯爽としたカッコいいイメージを持つ人も多いようですが、意外に地味な作業が多いものなんです。

その他に弁護士の法律扶助協会の審査委員や人権擁護委員会、法律相談センター運営委員会に参加し、弁護士の法的な対処を必要としている人に対しての司法サ

ービス、また身近な司法サービスを行うための体制づくりなどボランティア的な活動も行っています。

人生の一瞬に 貢献できるやりがい

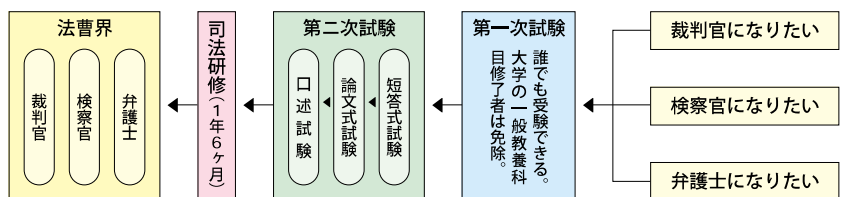
熊本大学に法学研究科が設置されていますが、

中松 そうですね。今、司法界は大きく変わろうとしている時期なんです。日弁連でも、過疎地域への公設事務所の設置をどう考えて公設事務所の設置などを検討していますし、私も委員会で参加している法律相談センターなど、多くの人が身近に法

律相談ができる窓口を設けようとしています。そのためには、やはり弁護士の人数が必要になってきますから、法学研究科が法曹界、弁護士を目指す人の育成に役立つしてくれることを願っています。特に熊本は、弁護士の数が不足していますから。

弁護士という仕事は、言ってみれば依頼者の人生の一瞬に立ち会うもの。時には関係者の事情やさまざまなことを考えて、揺れ惑うこともあります。だからこそ、依頼者の役に立ち、その人の人生に貢献できたと思う時にやりがいを感じます。まだまだ経験も浅く、惑うことも多いのですが、私は私なりに肩の力を抜いて、自分らしい仕事をしたいと思っています。

弁 護 士 に な る に は



■司法試験とは、裁判官、検察官又は弁護士になろうとする者に必要な学識とその応用力の有無を判定する国家試験で、第一次試験と第二次試験に分かれています。第一次試験は、第二次試験を受けるのに相当な教養と一般的な学力を有するかどうかが判定するものですが、学校教育法に定める大学において学士の学位を得るのに必要な一般教養科目の学習を終わった者等に対しては免除されています(司法試験法第4条参照)。第二次試験は、短答式試験、論文式試験、口述試験の3つに分かれており、一般的に短答式に合格したら次の論文式に、論文式に合格したら、口述試験に進み、口述試験に合格すると最終合格ということになります。最終合格後は、最高裁判所の司法研修所における1年6か月(平成11年度から、従来の「2年間」が改正されました。)の修習のち、裁判官、検察官、弁護士として、法曹の各分野で活躍することになります。

DATA

●平成12年度司法試験第二次試験出願者・合格者数等

出願者数(A)	36,203人
受験者数(B)	31,729人
短答式試験合格者数	6,125人
論文式試験合格者数	1,025人
最終合格者数(C)	994人
第二次試験合格率(C/A)	2.75%
対受験者合格率(C/B)	3.13%
合格者の平均年齢	26.55歳
24歳以下の合格者数	361人(全合格者の36.3%)
大学生の合格者数	311人(全合格者の31.3%)
合格者の性別	男性724人(71.3%) / 女性270人(27.2%)

※データは法務省ホームページより抜粋<法務省HP■<http://www.moj.go.jp/main.html>>

知の歴史は交流の歴史です。

幕末期、日本の近代医学は、長崎の出島に駐在していたオランダ人医師に西洋医学を学ぶことから始まりました。歴史の教科書でおなじみの「ターヘル・アナトミア」『解体新書』を翻訳した杉田玄白、前野良沢も、長崎でオランダ商館の医師ツクベリーの門下生として学びました。

熊本と縁の深い文学者・夏目漱石は、二世紀前にイギリス・ロンドンへ国費留学生として赴き、そこで出会ったヨーロッパ文明の奥深さと高い理想に、深い感銘を受けました。

今、日本へは最先端の研究や技術、知識を学ぶために、アジア諸国など世界各地から多くの若者たちが集まってきました。幕末・明治時代に青雲の志を胸に抱いた若者たちが、長崎へアメリカやヨーロッパへと旅立っていったように。

そうした知の交流の要として、大学の国際化・国際交流が21世紀のキーワードとして注目されています。熊本大学の国際交流事情はどうなんでしょうか。大津政康留学生センター長にお話しいただきます。

熊本大学では10年間で留学生を倍増する計画だそうです。

そうです。熊本大学では、現在多くの留学生が学んでいます。今後5年間で、さらに留学生の数を現在の1.5倍の400人に増やすことを計画しています。

その後10年間で、500人にまで増やす計画を打ち出しています。

背景には政府の「留学生受け入れ10万人計画」があります。国の流れに歩調を合わせた計画とはいえ、そこには国立大学の「独立行政法人化」や少子化なども視野に入れた、大学の個性化や国際競争力の強化といった将来戦略も含まれています。

九州の各大学への留学生はアジア各国を中心に増え続けています。しかし、言葉や文化・習慣の違いなどの壁に囲ま

国際交流事情

～国際総合大学としての熊本大学～

KUMAMOTO から世界へ

～グローバル・スタンダードをめざして～



れ、留学生たちは必ずしも満足な「日本体験」をしているとは言いきれません。日本人との付き合いも少なく、アパートと研究室の往復で過ごすといった留学生の日常や、それぞれの国ごとに隔絶した集団を作ってしまうケースが多いのも現状です。そこには、留学生と日本人学生との交流や友情が育つチャンスやシステムの不足が指摘されています。

そのため、留学体験が母国と日本との懸け橋となるような環境を作るためには、大学だけでなく行政、住民などを含んだ地域全体で考えていくべき問題も含まれています。

留学生の数は、毎年増え続けているのですか？

熊大ではここ数年、県内最多の年間250人前後の留学生を受け入れてきました。しかし昨年、他大学で留学生数が大幅に増加したのに比べて、やや伸び悩みを見せています。平成12年5月1日現在、熊本大学に在籍する留学生の数は249人。これは広島大学の723人、千葉大学の672人と比べてかなり低い数字です。

熊本大学への留学生は、アジアからの学生が全体の8割を占め、中でも中国からの留学生が127人(平成12年度)と圧倒的に多いのが目を引きます。マレーシアからは現在15人程の学生が在学しています。これはマレーシアが国の施策として工学系の技術者養成に力を入れているためで、政府派遣留学生がほとんどです。

留学生の専攻分野では医学部、工学部など自然科学系が多く、大学院生がその2/3近くを占めています。文科系の学部では、オーストラリア、アメリカ、イギリスなど大学間交流協定を結んでいる16校からの交換留学生が多く、熊本大学からも年間20人程の学生が海外の協定校へと留学してきます。

留学生だけでなく、海外の大学との国境を越えた交流も進んでいくのでしょうか？

大学間の国際交流は、これからの大きな課題です。現在行われている学生や研究者の人的交流から、さらに進んで専門分野間の共同研究・共同プロジェクト、国際合同講義・会議など、さまざまな分野での交流が期待されています。国際大学を標榜する「立命館アジア太平洋大学」では、海外の提携校が105校にも上っています。大学の国際化を多角的に進めるためにも、こうした国際間での大学連携が今後さらに重要になってくるでしょう。学内の検討グループでは、留学生だけでなく、こうした大学間交流協定校も現在の37校から2005年までに倍増することを提言しています。

国境を越えた大学間連携は、今後さらに重要性を増してくると思えます。

留学生の受け皿作りは大丈夫ですか？

留学生や研究者の交流を増やすためには、まず学内での受け皿作りが急務です。

熊本大学では「留学生課」と「国際交流課」を窓口にして海外からの学生や研究者を受け入れ、その支援を行っています。

1995年にできた「留学生センター」では、留学生を対象にした初級から上級までの日本語習得講座や、専門の相談員による悩み相談やカウンセリングなども行い、留学生の暮らし全般をサポートする体制作りにも力を入れています。

昨年8月にはセンターの移転・改装に伴って、留学生たちが気軽に立ち寄ってお茶を飲んだり、おしゃべりをしたり、日本人学生とも交流を深めることができる「交流室」がオープンしました。交流室はその二部が畳敷きの和室になっていて、日舞や茶道、着物の着付け教室などが定期的に開かれ、日本文化に親しめるようになっています。気軽に参加できて楽しいと、留学生に大変好評です。



■県別留学生数（平成12年5月1日現在）

県名	留学生数	合計
福岡	2,749	5,812
佐賀	257	
長崎	613	
熊本	387	
大分	746	
宮崎	140	
鹿児島	392	
沖縄	528	

■熊本県内大学別・国別留学生受入数（平成12年5月1日現在）

地域	ア		ジ		ア		中近東		オセアニア		北アメリカ		中南アメリカ		アフリカ		ヨーロッパ		小計	合計		
	中	韓	台	マ	パ	モ	香	ミ	カ	ベ	ス	ハ	シ	バ	ヨ	エ	イ	ス			ル	ア
熊本大学	127 (50)	20 (11)	6 (5)	3 (1)	15 (4)	6 (1)	2 (1)	1 (1)	4 (2)	1 (5)	2 (3)	4 (1)	1 (1)	1 (1)	7 (6)	1 (1)	5 (1)	2 (1)	3 (3)	1 (1)	14 (7)	249 (104)
県内A大学	14 (8)	7 (4)	2 (1)				1								1						25 (13)	
県内B大学	43 (19)	5 (5)	2 (2)																		60 (32)	
県内C大学	1	1			1		1														6 (1)	
県内D大学	3 (3)	1	2 (1)																		6 (4)	

※（ ）内の数字は、女子学生数を示す。

全学的な取り組みとは別に、昨年から大学院自然科学研究科で特別コースを開講し英語による授業を始めました。また、熊本大学、熊本学園大学、熊本県立大学の3大学間で既に実施されている日本人学生対象の単位互換制度を、留学生にまで広げることも現在検討されています。

留学生にとって一番頼りになるのが、学部学科ごとの指導教官です。時に親代わりともなっており、日本での保証人になったり、住まいの世話から日常の雑事までこまごまと世話をすするのが指導教官の役目です。こうした雑務は時間も労力もかかるため、受け入れを難しくしている要因ともなっています。また、受け入れに積極的なのは、留学経験や海外での研究実績のある一部の教官に限られる傾向があります。受け入れ窓口をもっと広げていくためにも、受け入れる指導教官へ一定の評価を与えたり、大学側の指導教官への支援を求め声が上がっています。「留学生倍増計画」を掛け声だけに終わらせないためにも、受け入れのための環境整備が急がれます。

熊本大学がこれから国際交流を進めていくための課題は何でしょうか？

モノ・カネ・情報の流れが国境を越えて、地球規模での経済・社会の体化が進む21世紀。地域（ローカル）を足場に、地球規模での新たな発想と視点が求められています。

熊本大学が国際的な「知のネットワーク」の二環として機能していくためには、バリアフリーな研究環境を整備し、世界水準（グローバルスタンダード）に見合った教育機関・研究拠点として認知されることが必要でしょう。熊本という地域固有の問題やテーマに精通していることも、熊本大学の重要な個性と考えられます。ローカルがグローバルと連結し、さらに大きな交流の輪を広げていくことがこれからの課題です。“顔の見える”大学として、熊本大学を世界に発信していくことが、真の国際化を考える指針となると考えています。

「熊本大学情報プラザ」を開設

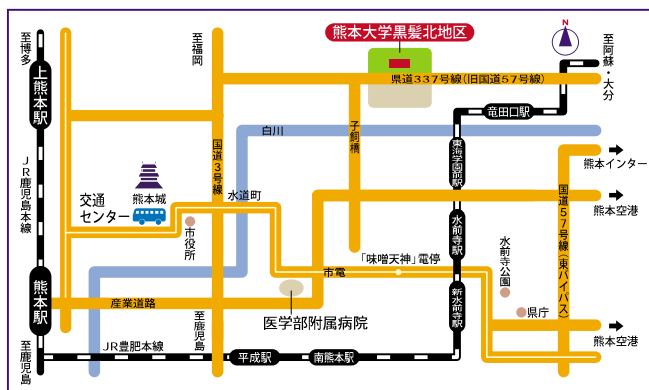
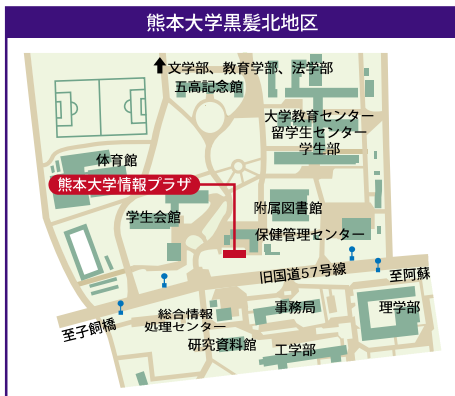
熊本大学は、平成13年4月1日に社会（地域住民、受験希望者、産業界等）に対して効率的かつ積極的に大学の情報を公表する場として、学内に「熊本大学情報プラザ」を開設しました。



「熊本大学情報プラザ」では2つのコーナーを設けており、「閲覧コーナー」では、熊本大学概要をはじめ、各学部等の概要、大学案内、各種報告書等大学に関する資料を一堂に取り揃えています。「視聴覚コーナー」では、過去に放映された熊本大学放送公開講座のビデオの視聴や熊本大学、文部科学省、各大学等のホームページ検索ができます。

また、開示請求相談室を設け、開示請求の受付、行政文書一覧の閲覧、行政文書の開示、情報公開に関する疑問・相談の対応を行っています。

■熊本大学情報プラザ位置図



●交通アクセス

- JR熊本駅から
市営バス ▶ 第一環状線（大学病院経由）に乗り、「子飼橋」下車 徒歩10分
- JR上熊本駅から
市営バス ▶ 第一環状線（京町本丁経由）に乗り、「子飼橋」下車 徒歩10分
- 交通センターから
市営バス ▶ 楠団地、竜田口駅、楠・武蔵塚駅に乗り「熊本大学前」下車
産交バス ▶ 大津（三里木、陣内経由）、武蔵ヶ丘団地行に乗り「熊本大学前」下車

「熊本大学生涯学習教育研究センター」を設置

熊本大学は、平成13年4月1日に生涯学習に関する教育研究及び調査を行うとともに、学内及び学外の関係機関と連携を図り、人文、社会及び自然科学の各分野の学術に関する教育研究成果を地域社会に還元する役割を担い、生涯学習を積極的に推進することを目的に



生涯学習教育研究センターと情報プラザは併設です

「熊本大学生涯学習教育研究センター」を設置しました。

同センターは、2人の専任教員と各学部等から選出された10名の兼務教員で次のような業務を行っています。

- ① 調査・研究部門
 - ① 生涯学習に関する調査・研究活動とその成果の社会への還元
 - ② 業務の評価
- ② 学習情報ネットワーク部門
 - ① 地域の関係団体・機関との連携・協力及び生涯学習ネットワークの構築
 - ② コンソーシアムの形成による社会人キャリア・アップ事業の推進
- ③ 講座開設部門
 - ① 本学の生涯学習活動の系統的・継続的な企画と実施
 - ② 公開講座等の広報活動

「熊本大学沿岸域環境科学教育研究センター」を設置



熊本大学は、平成13年4月1日に学内共同教育研究施設として「熊本大学沿岸域環境科学教育研究センター」を理学部内に設置しました。

「熊本大学沿岸域環境科学教育研究センター」は、日本最大級の干潟を有する有明海・八代海の沿岸域環境

を総合的に研究し、その成果を地域社会に還元する地域密着型を目指すもので、生態系を調査する「生物資源循環系解析学」、環境汚染や養殖魚の遺伝子等を調べる「生物資源保全・開発学」等の4分野からなっています。

当面、有明海・八代海の環境悪化のメカニズム解明に取り組み、タイラギやアサリの不漁原因調査や養殖ノリの色落ちについて遺伝子レベルの研究等を進めています。

また、4月5日には、江口学長、内野同センター長、角地事務局長ほか関係者により看板の上掲式を行いました。

熊大通信では、皆様のご意見・ご感想をお待ちしております。

●宛先●

Eメール / soh-koho@jim.kumamoto-u.ac.jp

熊本大学放送公開講座（熊本大学オン・エア）

講座名	開設期間等	放送回数	放送時間	受講対象者
(テレビ講座) 循環する世界	11月3日(土)～12月15日(土) 毎週土曜日	7回	午前11:00～午前11:30	一般市民
(ラジオ講座) 共に生きる	9月2日(日)～12月2日(日) 毎週日曜日	14回	午前8:10～午前8:30	一般市民

熊本大学公開講座

実施会場	講座名	内 容	回数 時間数	受付期間	開講日	募集人数 対象者	受講料
教育学部附属 養護学校	陶芸教室	本講座は陶芸に関する基本的な知識や技能の習得を目指すと同時に、広く市民一般に開かれた学校づくりを推進するものです。	16回 32時間	4月23日(月) ～4月27日(金)	5月19日(土) ～12月15日(土)	30名 一般市民	10,800円 実費別途 4,500円
荒尾市 ふれあい福祉 センター	家族性アミロイド ポリニューロパチ ー(FAP): 遺伝性疾 患と社会の係わり	熊本に極めて大きなフォーカスを持つ遺伝性疾患のFAPをモデルに、遺伝性疾患と社会との関係を模索し他疾患に示唆を与えます。	5回 10時間	4月16日(月) ～5月31日(木)	6月9日(土) ～10月13日(土)	30名 一般市民及び FAP患者・家 族等	5,800円 実費別途 1,000円
医療技術短期 大学部 202講義室	医療技術者のための 情報処理 一情報 検索	どんな図書や雑誌があるか、どんな文献があるか、どうやったら手に入るか、そんな情報検索にWWWを利用する方法の一部を紹介します。	1回 5時間	5月21日(月) ～6月1日(金)	6月16日(土)	20名 医療技術者	4,800円
教育学部 224教室	ハーンと漱石	熊本にゆかりの深い2人の文豪、ラフカディオ・ハーンと夏目漱石について熊本時代を中心にいろいろお話しします。	8回 20時間	6月4日(月) ～7月6日(金)	7月9日(月) ～7月16日(月)	30名 一般市民 及び学生	7,800円
教育学部附属 教育実践総合 センター	リーダーシップ・ トレーニング A・ B・C	リーダーシップの科学的研究を基礎に参加者のリーダーシップ向上と人間関係改善のための知識、技能を身に付けます。	各3回 各20時間	6月15日(金) ～7月16日(月)	A: 7/26～7/28 B: 8/23～8/25 C: 9/20～9/22	各25名 組織、団体の 管理者及びリ ーダー	7,800円
大学教育研究 センター	「シュピーゲル」 誌を読む会（中級 ドイツ語講座）	ドイツの代表的ニュース週刊誌「シュピーゲル」の様々な記事を読むことによって世界を見る眼を養うとともに独語読解力の一層の向上を図ります。	9回 18時間	8月1日(水) ～8月31日(金)	9月1日(土) ～11月10日(土)	20名 一般市民 及び学生	7,800円 実費別途 1,000円
大学教育研究 センター	映画は時代を映す 鏡	20世紀が時代を映し撮って来た映画を通じて、20世紀を振り返り21世紀を展望します。具体的な映像作品を鑑賞しながら平易な講義を心がけていきます。	10回 20時間	8月13日(月) ～9月14日(金)	9月22日(土) ～12月1日(土)	25名 一般市民 及び学生	7,800円
薬学部 第一講義室	身の回りの「くす り」と健康	本講座では、薬の専門家が健康維持に役立つ薬の話題をわかりやすく解説します。	5回 5時間	7月16日(月) ～8月15日(水)	9月22日(土) ～10月20日(土)	40名 一般市民 及び学生	4,800円
教育学部 技術教室	電子玩具製作で学 ぶコンピュータの 基礎基本	デジタル技術の基本を理解すると共に、ロボットの原点となる電子玩具を製作し、コンピュータで操作する基本技術を習得します。	5回 15時間	8月1日(水) ～8月31日(金)	9月22日(土) ～10月20日(土)	15名 中学生以上	6,800円 実費別途 3,000円
文学部 高橋研究室	哲学研究会	この数年は「古事記」を中心とした日本思想を対象にしてきました。現在「日本人の心」（相良 亨）を読み始めています。	12回 24時間	4月1日(日) ～	4月11日(水) ～平成14年3月 13日(水)	若干名 制限なし	無料 教材費毎月 1,000円
教育学部附属 養護学校	知的障害児・者の ためのコンピュ ータ教室	知的障害児・者対象に、簡単なコンピュータ操作（お絵描き、ゲーム、ワープロ、インターネット等）を指導します。	10回 20時間	4月2日(月) ～4月27日(金)	5月26日(土) ～平成14年3月 16日(土)	10名 療育手帳所有 者	無料 教材費毎月 1,000円
大学院自然科 学研究科	数学の世界への招 待	身近な話題を取り上げながら、数学の魅力をお話します。いったい何のために数学を習うのか、学校で学ぶ数学は何の役に立つのか、数学の面白さはどこにあるのか、そのような疑問にお答えしたいと思います。	4回 16時間	7月2日(月) ～8月17日(金)	8月22日(水) ～8月25日(土)	40名 主に高校生、 学生・社会人 も可	無料
教育学部 技術教室	パソコンと手作り 年賀状	パソコンを用いて、手作りの味満載の年賀状を作成します。それと共に、パソコン操作の基本技術を習得します。	2回 6時間	11月1日(木) ～11月22日(木)	12月1日(土)、 12月8日(土)	12名 中学生以上	無料 教材費毎月 2,000円

■申し込み方法

- 所定の申込書・原符・領収証書に必要事項を記入の上、受講料を添えて経理部経理課収入係へ直接申し込んでください。
- 現金書留の場合は、①受講料②申込書・原符・領収証書③返信用封筒（80円切手貼付のもの、領収証書返信用）を同封して経理部経理課収入係まで送付してください。なお、定員に達した時点で締め切る場合がありますので、お問い合わせ先に申込状況を確認の上、郵送してください。

■問い合わせ先

熊本大学総務部総務課生涯学習係

〒860-8555 熊本市黒髪2-39-1

TEL:096-342-3121 FAX:096-342-3110

E-mail:sos-syogai@jimu.kumamoto-u.ac.jp

URL:http://www.kumamoto-u.ac.jp/univ-j.html